



2026（令和8）年5月25日発行
（編集）愛光本部
（TEL）043-484-6391
（HP）<https://www.rc-aikoh.or.jp/>

新しい年度を迎え、各事業所では新任職員や新たな仲間を迎え、活気に満ちたスタートを切りました。昨年度の歩みや課題を振り返りつつ、今年度のスローガンや目標を掲げ、一人ひとりがより良い支援や環境づくりに向けて歩みを進めています。日々の活動の中では、季節を感じる行事を通じた温かい交流や、地域とのつながりを深める新たな挑戦、より安心・安全に過ごせるための工夫など、それぞれの現場で創意工夫を凝らした取り組みが始まっています。今年度も利用者の皆様の思いに寄り添い、共に未来へ向かって一歩ずつ丁寧に歩みを進めてまいります。

□事業経過など（2026.4.1～）

1	水	辞令交付式/新任職員研修
2	木	新任職員研修
3	金	新任職員研修
6	月	新任職員研修/メンター事前研修
7	火	業務執行会議
9	木	5S研修
15	水	地域食堂ともいき
17	金	実習指導者会議
20	月	佐倉圏域事業部実績会議/人事ワーキング会議
22	水	障害者支援事業部実績会議/地域福祉事業部実績会議/後援会運営会議/財務プロジェクト
23	木	高齢者福祉事業部実績会議
25	土	ほっとタイム（春の落語会）
27	月	本部実績会議

■月報から

□ 辞令交付式（本部）

4月1日、辞令交付式を開催した。この4月より新たに8名の正職員を迎えての新年度スタートとなった。異動職員も含めて理事長より一人ひとりに辞令が交付され、皆さん新たな決意を胸に、身の引き締まった表情で辞令を受け取っていた。

（総務課長 宮本 典昭）

□ 新年度（ルミエール）

『一歩先に行く支援』、このスローガンに、何を感じるだろうか。今までのルミエールとは違うタイプのスローガンである。「一歩先に行く支援」というスローガンには、今目の前にある支援だけでなく、利用者一人ひとりの未来を見据え、より良い生活につながる支援を行っていききたいという思いが込められている。障害者支援施設における支援は、日々の生活を安全に過ごしてもらっただけでなく、その人らしさや可能性を大切にしながら、「できること」を増やし、「やってみたい」という気持ちを支えていくことが重要である。

そのためには、利用者の小さな変化や思いに気づき、職員が一歩先を考えて行動する姿勢が必要になる。また、「一歩先に行く」とは、特別なことをするという意味ではなく、利用者の立場に立ち、「今、何が必要か」「これからどのような支援が望ましいか」を考え、丁寧に積み重ねていくことである。安心できる環境づくりはもちろん、地域とのつながり、利用者の意思を尊重した支援、生活の楽しみや生きがいがづくり、将来につながる支援について意識を持つことが大切である。

職員一人ひとりが現状に満足することなく、学び合い、協力し合いながら、利用者と共に未来へ進んでいく。その思いを「一歩先に行く支援」という言葉に込めているのである。

（ルミエール課長 原 宏之）

□ 新任職員をむかえて（めいわ）

今年度、めいわでは3名の新任職員を迎えた。緊張や戸惑いがある中で業務トレーニングが開始されている。利用者や職員の氏名、業務内容、個別支援やケアなど、習得すべき事項は多岐にわたる。新任職員を迎えた利用者は興味関心が高く、多くの質問を投げかける様子が見られた。新任職員も徐々に利用者とのコミュニケーションに慣れつつある。

4月12日には、新任職員がより利用者に溶け込めるよう、スタンプラリー企画を実施した。スタンプを集めることで景品が得られる内容とし、スタンプの取得ポイントを新任職員に設定することで、参加した利用者全員が新任職員と関わる機会を設けた。利用者にとっても楽しみながら新任職員を迎えることができ、双方にとって打ち解ける良い機会となった。

来月には夜勤トレーニングも予定している。独り立ちまでには一定の時間を要するが、メンターや先輩職員の助言を受けながら、早期の自立に向けて引き続き支援していく。

（めいわ課長 日野 史生）

□ 祝！佐倉ふるさと広場 販売所への出品開始！（根郷通所センター）

余暇活動の一環として利用していた佐倉市内のキャンプ場「サンセットヒルズ」において、スウェーデントーチを取り扱ってもらえる可能性があるとの話があり、営業活動を行うこととなった。

その準備として行政への確認を進めたところ「サンセットヒルズ」は佐倉市の観光施策の一環として、佐倉市魅力推進課および佐倉市観光協会が関わる施設であることが分かった。

さらに、オランダ風車を有する観光資源「佐倉ふるさと広場」も同様に佐倉市の観光施策の一環として、佐倉市魅力推進課および佐倉市観光協会が関わる施設であり、佐倉ふるさと広場に隣接する販売所「佐蘭花」も同様の枠組みのもとで運用されていることも分かった。

このことから、同エリアを新たな販路の一つとして位置づけることは法人にとっても有益であると判断し、営業活動および商品展開に本格的に取り組む方針を固めた。

このエリアは佐倉市を代表する観光スポットであり、年間約28万人が訪れている。加えて、令和10年度末までに拡張工事が予定されており、完成後には年間約47万人の来場が見込まれているとのことである。（※数値は佐倉市議会における執行部答弁に基づく推計値）

その後、事前準備を進めたうえで、1月に佐倉市魅力推進課および佐倉市観光協会と協議を実施した。その結果、3月には観光協会への加入に関する審議を通過し、商品設置に向けて木工班と陶芸班が連携しながら最終確認および準備を進めることとなった。

そして4月13日には「佐蘭花」への初納品を無事に完了し、現在は「サンセットヒルズ」に設置するスウェーデントーチの最終工程に取り組んでいる。

一方で販路拡大が進む中、これまで定期的に木材を提供していた業者から、職人の多忙により木材の搬入が遅れているとの連絡があった。そのため、新たな木材供給先の検討が必要となり、法人と取引のある北総緑化開発へ連絡を取り協力を得られることとなった。なお、同社は行政の下請け業務も担っていることから、佐倉市公園緑地課との連携の可能性についても視野に入れていくこととする。

最後に、佐倉ふるさと広場に隣接する「佐蘭花」は人目に触れやすく、繁忙期には多くの利用者が見込まれる立地にあるため、酒々井パーキングエリアに続く重要な販売拠点となることが期待される。また、法人の広報面においても大きな役割を担うことが見込まれる。

今回の販路拡大は、佐倉市内の社会福祉法人が地域を代表する観光拠点において自主生産品を出品するものであり、地域資源と福祉活動の結びつきを強化する点においても大きな意義がある。また、観光客との接点を通じて法人の活動への理解を広め、佐倉市との結びつきがより一層深まる取り組みとなるよう期待する。

（根郷通所センター所長 菊地 暁生）

□ 職場の環境を整えよう！（よもぎの園）

昨年度の売上が確定したばかりだが、4月になったので、この1年をどのように進めていくか皆で検討していく日々が始まった。売上の向上や利用者のプログラミングや、できる作業を増やしていくことなど、考えることは山ほどある。

そのような中で、まずは作業環境や施設の環境を整えてみようということになった。無駄の整理や生産性向上のための取り組みを、この1年をかけて実践していきたい。

ただ、いきなり大きな変化を起こすことはできないので、スモールステップを積み重ねながら、トータルで環境変化の底上げができればと考えている。まずは職員会議などでそれぞれの考えを共有しながら、優先順位をつけて始めていきたい。

（よもぎの園 近藤 真一）

□ 当年度のスローガン（ワークショップかぶらぎ）

2026年度の「ワークショップかぶらぎ」のスローガンが決まった。

か 感謝して
ぶ ぶつかりあって
ら ライバルは
ぎ 技術を高める昨日の自分

かぶらぎではこの数年、現場で働くスタッフから案を募り、投票により決定している。考案したスタッフは「日々の積み重ねを大切に、昨日よりも今日の自分が良かった！と思ってもらいたいという願いを込めた」と話す。内容もさることながら、「あいうえお作文」形式にまとめてあるひと工夫が光る。

（ワークショップかぶらぎ 宮部 和樹）

□ 新年度が始まって（アシスト）

4月から新年度が始まり、3月の月報で報告した基幹相談支援センターの業務について、皆で話をした。今年度は参加者の希望を反映した研修機会の確保をメインに、事例検討会についても司会や板書など各職員に役割を持ってもらい、各職員のレベルアップも目的とすることなどの意見交換を行った。職員の役割については、いきなり研修の中で司会を行うことに抵抗感を抱く職員も多いとは思っているので、部長からの提案で、月2回行っているアシスト会議のひとつで事例検討を行い、その中で各職員が司会や板書などの練習をできるようにしていくこととした。また、研修の名称を前年度まで全て「合同事例検討会」としていたが、今年度より「スキルアップ研修」とし、目的をより分かりやすく伝えるよう工夫も行ったうえで実施していこうと思っている。

（アシスト 小平 和俊）

□ 花見（はちす苑）

特養では、毎年恒例の花見行事が4月5日（日）に開催された。天候にも恵まれ、大盛況に終えることができた。毎年この時期になると職員の間では、「今年の桜の開花はいつだろう」「当日まで花は咲いてくれるだろうか」「天気はどうだろう」と、自然を相手にした行事ならではの会話で盛り上がる。開花状況と天候を日々確認しながら、まさに「桜よ、まだ散らないで咲いていておくれ」と願いつつ当日を迎えるのも、毎年変わらない春の風景となっていた。

当日はほぼすべての利用者が花見に参加した。「はちす苑栄養士の特製手作り甘酒」も振る舞われ、春の優しい陽気の中で口にする甘酒は、ほんのりとした甘さと温かさが身体にしみわたり、入居者の皆様からも「美味しいな」「春だね」と好評であった。満開から折り返し、ひらひらと舞い散る桜の花を風流に感じながら味わう季節の飲み物は、視覚だけではなく味覚からも春を感じることができたのではないだろうか。

それぞれの分野でICT化が進む中、花見を通して感じたことは、この（実際に見て触れて感じる）人の感動を未来の技術で再現することができるのだろうか、ということである。穏やかに吹く風、ブランコの音、無邪気に走り回る子供たちの声、懐かしきあの頃を思い出す……。利用者それぞれが、思い思いの時間の過ごし方をされたことであろう。来年もまたこの桜の木の下で皆様とともに春を迎えられることを願いながら、日々の支援に努めていきたい。

（はちす苑課長 梶 直芳）

□ ニーズ調査アンケート集計結果（佐倉市南部地域包括支援センター）

昨年度末、南部圏域の住民の方や専門職を対象にニーズ調査アンケートを行った。その集計結果がまとまった。回答者は地域住民96名、専門職32名の計128名である。日頃から特に困っていると感じていることとして、「通院」「買い物」「交流の場の不足」が上位に挙げられた。次に「認知症の対応」「孤立・見守り」を課題と感じている方も多かった。

今後はこの結果を踏まえ、包括の取り組みを検討し、引き続き地域の課題について地域の方々と検討していきたい。（佐倉市南部地域包括支援センター 森 由美子）

□ 入館システム2年目突入（佐倉市南部児童センター）

昨年度より導入した入館システムは、これまでの受付での記入をなくし、個々に作成したカードで入館できるようにしたものである。この1年間で感じたこととして、乳幼児親子にとっては受付での記入が不要になったことで、より便利に利用している様子が見られた。しかし、小中学生に関しては「なくした」「忘れた」という声が大半を占めてしまった。

様子を見てみると、カードを持参して出し入れするよりも、受付で記入する方が簡単だと感じているようだ。カードは子どもたちのためになっていないのだろうか、改めて振り返って考えてみた。入館システムにしたことで、緊急時の連絡先が速やかに確認できるようになり、住所や電話番号などの未記入もすぐに把握できるようになった。子どもたちがより安心して遊べる環境づくりに役立っていることは間違いない。

では、どうすれば子どもたちにカードを利用してもらえるのか。カードのバーコード部分を携帯で撮って利用する方法を提案してみる、カードを使ったほうがスムーズに入館できるという“イメージ作戦”を試してみるなど、いろいろと考えてみた。しかし、結局のところ、焦らず声をかけ続けていくことにした。初年度からうまく切り替わらなくて当然であり、毎年少しずつ浸透していくものではないかと気持ちを切り替えた4月。すると、ほんの少しずつではあるが、カードを持ってくる子どもたちが増えつつある。子どもたちが安心して過ごせる場所であり続けられるよう、丁寧に取り組んでいきたい

（佐倉市南部児童センター 吉田 知加子）

□ カラオケ広場（佐倉市南部地域福祉センター）

令和7年度中にA棟が休館になったため、好評だった「カラオケ広場」の事業がしばらくの間、休館とともに中断していた。カラオケの事業は、「大きな音量で自由に気持ちよく歌うことが醍醐味であり、本来の目的である」というのがセンタースタッフの共通認識であった。しかし、第一に感じていたのは、併設の地域包括支援センターとアシストが相談業務を行っているため、その業務中に必ず近くでカラオケの音が漏れるということである。そのため、再び開催することはとても困難だろうと予想していた。

しかしながら、年度後半になり、わずかにセンターの貸館の部屋に、数カ所空きがあることが分かった。そして、唯一土曜日だけは、包括支援センターと支援センターアシストが休館日であり、相談業務は無い。それを踏まえて何度も関係職員と協議をして決定した。

そして、令和8年度の4月後半に「カラオケ広場」が再スタートを果たした。昨年度の「大広間の和室」の雰囲気から一転、あまり雰囲気の「らしくない」研修室へ移動になったが、利用者は雰囲気よりも何よりも、再び好きなだけ歌を歌えることが楽しみだったようだ。

（佐倉市南部地域福祉センター 青山 秀人）

